

新刊紹介

『インド 児童労働の地をゆく』アジヤを見る眼シリーズ112

田部 昇

本書の題名「児童労働の地」は八〇年代後半、南インド最南端シバカシ村のマッチと花火工場で多数の幼い子どもたちが爆死した悲惨な出来事に由来する。これはその後、*The Land of Child Labor* と呼ばれることになる。その含意は、子どもたちが初等教育を受ける機会も与えられないことなく、ただひたすら家計を支えるために近隣の工場や作業場に働き続ける幼い女兒や男児の生きる世界（くに）である。児童労働の問題は経済や社会、そして国家意思に深くかかわることが認識されるようになる。子どもたちの労働特性は「不就学児童」や「学業放棄児童」であり、また「債務労働」である。本書の著者は一九九〇年代後半の五年間にわたってインドの五地域（県）の「児童労働の地」の現地調査をおこない、不就学児童を生み出す「初等教育の貧困」や「飢餓的貧困」、さらには、「慣習化した債務労働」の実像を明らかにした。（「はしがき」および「序章 児童労働の地をゆく」）

インドは今、発展の可能性著しい新興国と期待される国である。しかし「児童労働の地」は全土に拡大を続け、不就学児童はいまや軽工業品の輸出経済を裏で支える安価な労働力となる。「児童労働の地」は歴史的に形成された産地や、農村立地の地場産業の形態をとる。子どもたちの仕事はマッチ・花火類、伝統的手織りカーペット類、銀製装身具類、伝統染織品類など産品の分野は多岐にわたる。これらは近年、輸出需要の伸長が目覚ましい産品であり、技術・技能の観点からみると「伝統工芸品」の領域に属するものが多い。また、生産単位は概ね農村立地の家内工業と分類される小規模・零細事業所と定義できる。

「一章 いま、なぜ児童労働か」著者が児童労働の現場に立ち、フィールドワークの観察と分析の作業過程で留意した視点を整理し、いくつかの問題提起をおこなう。主要テーマは、①初等教育の〈機会欠乏〉という構造的現象（教育の貧困）、および、②不就学児童労働へのアプローチと政策含意（市場主義対ラディカリズム）、に収斂する。

「二章 シバカシ村のマッチ工女—なぜ、子どもの労働が必要とされるのか」

経済の二重性に加えて「社会の二重性」が厳然として存在することを確認する。子どもたちの社会構成にかかわる差別・抑圧、また、その結

果としての教育機会の喪失、債務労働という雇用慣行や搾取など、マッチ工女や花火工女たちの前に立ちはだかる「峠道」は〈社会的機会の喪失〉を意味する。その險しさの象徴は「教育の貧困」にある。

「三章 タール砂漠の児童労働—技能継承・債務労働・不就学」

インド西北部、砂漠の旧藩王国ラージャスターン、シェイカワティ地域に伝統工芸品の数々とその生産現場に不就学児童労働の姿を追う。シバカシ村の事例と同じ経済と社会の二重性という「部分的労働市場」の特徴をもつ。しかしそこには、地域に特有のカースト制度に深く根ざす雇用慣行、すなわちギルド制（同業組合）のもとでの技能継承と債務労働の問題がある。

「四章 ガンジス平野のカーベット村—ミルザプル・バードイ村のドウリー（Dhulis）織り」

伝統的インドカーベットの産地にみる「産業移植」の特徴、生産委託による独立自営織り職人（農民）と子どもの家族労働、そしてこれらの生産単位が村や県一帯にゆるやかな結合体として組織化された「生産組織」の姿をみる。村や県全体の生産調整をコントロールする多国籍流通会社（商社機能）の存在、海外の価格動向を迅速に反映する「情報」独占、など、巨大な多国籍企業の本社機能が支配する産地の姿をみた。

「五章 カルカッタのスラムと児童労働—ハウラー橋からスラムへの道」

都市人口一〇〇万人を超す大都会カルカッタ（現コルカタ都市圏）にはスラムと呼ばれる巨大な人間居住区があり、そこにもまた、「児童労働の地」が増殖を続ける。その一角、ティルジャラ（Tiljala）地区に幼女の労働実態をみる。

「六章 西ガーツ山脈を越える児童労働—ウディピ村から街の厨房へ」

インド全土に拡大・発展しつつある都市飲食産業、ホテルやレストランに労働の機会を求めて移動する子どもたちの姿を追う。南インド、ウディピ村出身の特定カースト社会階層の子どもたち（指定カースト／ダリット（旧称不可触民））である。子どもの母語や社会慣習とは異文化の他州に移動し、菜食料理調理場の血洗いに生活の糧を得る。ここにはカースト観念の根源にある宗教的倫理観、〈浄と穢れ〉が支配する労働慣習を見ることができ。子どもの移動範囲は南インド一帯の中小レストランやホテルの厨房にいたる。新しい児童労働の移動の型といえる。

「七章 不就学児童労働を考える」以上に述べた五地域に共通する問題群、すなわち、①児童労働市場は虚構か、②飢餓的貧困は存在するか、③教育の貧困は構造的か、そして、④児童労働は社会慣習か、以上の四点について暫定的な結論と今後の仮説を提示している。

（たべ のぼる／明治学院大学 名誉教授）